

かいあんこくごしょう
提唱 槐安国語鈔講話(十四)

頌古

第十一則 汝名什麼

白田 劫石

垂示に曰く、蛇は一寸を出せば其の大小を知り、人は一言を出せば其の長短を知る。衲僧門下に到っては、一言一句一機一境、浅深を弁ぜんことを要し、向背を見んことを要す。況んや作家相見、目撃して道存するをや。未だ口を開かざる以前、早く是れ相見し了る。何によってか此くの如くなる？

兩忘老師は、「相見」という言葉を苟くも用いないよう、厳しく注意された。

修行時の境涯というものは、いくら隠そうとしても隠せるものではない。

明眼の師家の鏡の前に出ると、一見弁見である。

まことにこの垂示にあるように、「蛇は一寸を出せば其の大小を知り、人は一言を出せば其の長短を知る。」だから何としても自分に深切に実境涯を磨き深めてゆくより仕方がない。

常に第一義底を基本に据えて、第二義第三義のためにせず、「大法をすべてに優先する」、この基本を打失してはならないのである。

『臨濟録』にも、いろいろの賓主相見の実例が挙げられているが、本則の仰聖二師の如きは、磨き上げられた境涯の知音同士、その出逢いは、後昆に範を垂れる「目撃して道存す、亦以て声を容るべからざる」底である。言葉をいささかも挟むことができぬ絶妙な応接

である。

挙す。仰山三聖に問う、汝名は什麼ぞ？ 聖云く、惠寂。山云く、惠寂は是れ我。聖云く、我が名は惠然。仰山、呵呵大笑す。師 著語して云く、什麼れの処にか去る也？

本則は、仰山惠寂と三聖惠然の兩大老の相見の因縁で、龍象の蹠踏の機用を見ているような、天関を回し地軸を転ずるはたらきの一則である。

『碧巖集』にもこの則は出ているが、この『槐安国語』では、大灯国師が最後に著語されていて、それが「頌」と相俟って本則の香りを一段と高めている。

さて本則に入る前に、この兩大老の法脈と年令をみると、次のようになる。

百丈懐海	┌	黄檗希運	臨濟義玄	三聖惠然
	└	瀧山靈佑	仰山惠寂	

このように仰山惠寂禅師は、瀧山靈佑禅師の法を嗣いだ大宗匠で、瀧仰宗の開山であって老々大々、年も大分とっておられる。これに対して三聖惠然禅師は、このときは臨濟義玄禅師の法を嗣ぎ、行脚をしている意気軒昂なバリバリの新進気鋭の雲水であった。

このように老々大々と気鋭の新進との出逢いであるが、その宗旨のやりとりは大変見事で、両者に寸分の隙がない。

仰山 三聖に問う、汝名は什麼ぞ？

この問いは、一見すると何でもない、ただ相手の名を聞いているようにみえるが、実はその中に恐るべき魂胆が蔵されている。「什麼」は、「何」と同意である。

達磨大師は、梁の武帝の“朕に対する者は誰そ？”という問に対して“不識”と答え、又六祖は、南岳の讓和尚が“崇山の安国師の

処より来る”というに対して“恁麼に来る者は是れ誰そ？”と問い、それに対して讓和尚は八年の後に下語して“説似一物即不中”と答えている。

何の誰と名のっているそやつは、一体何か、実はこれは容易ならざる問いなのである。

さてここでは相手の人物の名前が分らないで名を聞いているわけではない。そこには相手を頭からガブリッと一呑みに呑みほしてしまうという恐ろしい勢がみえる。

だから白隠老漢もここに【獅子嘖呻^{しんざん}】と下語している。獅子がウオーッとうなった。又【頂門^{じゅあまけい}に豎^{ちゆうご}す摩醯^{まけい}の眼、肘後斜めに懸く奪命の符】とおく。これは、摩醯修羅という修羅が一隻眼を以て睨みつけ、また肘後に奪命の神符をかけて命を奪ってしまうという有様だという。

普通の者であれば、こうやられると一たまりもなく喪身失命して、グーの音も出ないところであるが、そこはそれ臨済下で鍛え上げた三聖恵然のこと、そのとき義経少しも騒がず。

聖云く、恵寂。

ただ一言、“恵寂”と切って放った。

これは、恐るべき名刀の切れ味である。斬った跡かたもない。

いうまでもなく恵寂というのは、いま目の前にいる瀧仰宗の開山の仰山恵寂禅師その人の名である。その名をとりもち来って、恵寂と切って放った。

白隠老漢、【象王回顔】と下語。相手が獅子ならば、こちらは象王じゃ。目にもとまらぬ早業で、相手を踏みつづけて、跡かたもない。三軍の旗を奪い鼓を奪うというおそるべきはたらきである。

名人と達人との出逢いである。

さてこれに対して仰山はどうか？

山云く、恵寂は是れ我。

舞台が双収から、双放にグルリッと変わる。

人境俱奪から人境俱不奪に転ずる。見事である。真っ黒な闇が、明皎々たる太陽の光の世界となる。

ここの下語。【曾て鉄馬に騎って重城に入る。勅下って伝え聞く六国の清きことを】「汝名は何ぞ」といわれて、危亡をもちえりみず、ただ一騎敵の城をめがけて攻め入ったが、「恵寂はこれ我」との一声によって、天下太平となり、敵も味方もなくなった。

また【落花意有って流水に随う、流水情無くして落花を恋う】落花と流水とが互いに暗合明投、有意のままが無意、無情のままが有情で密室風を通ぜぬ有様、互いに円融無礙、見事というほかはない。

それに対して、今度は三聖恵然はどう？

聖云く、吾が名は恵然。

白隠老漢は、「評」の中で「頭を改め、尾を換う。九尾の野狐変体多し」といっているが、まことに龍象の蹴踏、機々相投じたその転身の円転活脱、目をみはるばかりである。

ここの下語。【雪後始めて知る松柏の操、事艱にして方に知る丈夫の心】千鍛百錬された肚裏からの宗旨の扱いがさすがで、些かのぼるをも出さぬ。それを松柏の操といった。

さてこれを見て、仰山はどうしたか？

仰山 呵呵大笑す。

この笑いによって天関が回らされ、地軸が転ぜられた。

これによって、この兩大老の出逢いの一幕のすべての幕が下ろされた。この笑いの落所を明らかにしないと、推理になり禅学に終わってしまう。ここが肝心かなめのところである。

だから白隠老漢も下語して【一に岩頭の笑に似て、又岩頭の笑に非ず。一等に笑う。何としてか両段と為る？】と拶しておられる。黒目玉でしかと見届けねばならない。こいつばかりは註脚ができぬ。

本則はこれで終わりであるが、大灯国師は、ここで最後にわざわざ

ざ著語をつけられた。深切を極めている。

師 著語して云く、什麼れの処にか去る也？

このところに白隠老漢は、【貴ぶべし、恐るべし】と下語し、また【長慶来也】【曹溪の波浪無くんば、限り無き平人陸沈せられん】と重ねて置く。

この【長慶来也】というのは、保福と長慶が遊山するついで、保福が手を以て指して“這裏便ち是れ妙峰頂”といったのに対して、長慶が“是は即ち是、可惜許！”といった因縁を指している。

つまりはこの大灯国師の著語がないと、髑髏が野にいっぱいになってしまうであろうとの意である。

次の【曹溪云々】も、この著語の毒波浪がないと、相似禅に墮してしまうとの意である。

「評」の中で、白隠老漢は、次のように述べておられる。

この「何れの処にか去る」の一語、「これはこれ吾が横岳大応国師、万里の鯨波に跨って息耕靈鷲莊屋裏に入って、隻手に無柄の鈍鉄鎌を奪い得去って、一鑊に鑊出する底の脱曲の破大椀、東海日多の児孫をして十年五歳、薄粥も亦快く咽に通ぜしめざるは、これこの狼毒也。」

人人、室内でこの玄旨をかみ破り真正の見解を呈すべきである。

“さあ何れの処にか去るや？”

頌に曰く

くにち
 照日影中 雪の晴るる春
ばいし
 梅腮柳面 芳を戦わして新たなり
 詩縁風興 限り無き意
 独り許す 苦吟野外の人

『碧巖集』の頌では、【雙収雙放如何なる宗ぞ。虎に騎る、由来絶功を要す】として名人同士の手に汗をにぎる大相撲のような宗旨がハッキリと頌出されているが、ここでの大灯国師の頌は、風流な遊山の扱いである。

これについては、白隠老漢の「評」ですべてが尽きているので、これを掲げる。

「東帝の純化既に行なわれて、旧年の氷雪たちまち消融し、新歳の溪流次第に漲る。千葉濃緑の顔を展べ、万枝紅紫の唇を解く。各々芳菲をたたかわしめ互に嬌艶を争う。

其の望底の佳趣、吟中の気味、苦吟歳月を積んで深く詩道の佳境に入得する底の逋客ほきやくに非んば則ち輒たやすく知ること能わず。

道人も亦然り。潜修功積もり、密参力充つるときんば、八識らや頼耶の暗谷を蹈翻して大円鏡光の恵日たちまち展出すときんば、有為往相の積雪たちまち解け、罪累業障の凝相たちまち消ゆ。

越えて四弘願輪に轄くさびし、一乗の大車に鞭打ちて、増進して退かざるときんば、真如平等の堅凍を撃碎し、法性一枚の層氷を消融し、真如不二の聖境に遊戯し、明暗双々底の宝処に逍遙し、百華叢裡に遊ぶが如く、仏祖も手を挟むことを得ず。

然寂二老の如きは、総に是れ者般の人、その唱拍鼓舞、恰かも春花の春暖を得て、紅紫をたたかわしむに似たり。二老相見の当意を知らんと欲せば、国師末後の一著に参ぜよ。」

この二大老の機用を、仏祖も手をさしはさむことのできない真如不二の聖境、明暗双々底の宝処とし、それを春の花が暖を得て、その色香を競いあうすがたにたとえているのである。

「国師末後の一著」とは、「何れの処へか去る」という著語のことである。

さて大灯国師の頌をみてみよう。

煦日影中 雪の晴るる春

これは春とはなつたが、まだ春雪に覆われて春の太陽がさんさんとふりそそぐ景観の中に、春の息吹きがほつほつと感じられる季節である。早春賦である。

下語。【雨前 初めは見る華間の葉、雨後 兼ねて葉底に華無し】雨の降る前は、花が咲き乱れて葉はその花の影でかすかに見えていたが、雨後にはその花がすっかり散ってあとかたなく、葉のみとなった。花の紅から葉の緑に転ずる変化、双収から双放への轉身である。

梅腮柳面 芳を戦わして新たなり

早春の生命をふき返した樹木の中で、梅と柳がその顔容を競いあっている。この真空妙有のすがたの当体に対する下語。【常に憶う、江南三月の裏、鷓鴣鳴くところ百花芳し】この二大老の間柄にみられる香り、何としても忘れることができない。「常憶」の二字、まことに含蓄が深い。

詩縁風興 限り無き意

その言うに言えず、解くに解けぬ甚深の風趣、こればかりは知る人ぞ知るで、他を以て如何ともしがたい。知音がない。

下語。【暮春には春服既に成り、冠者五六人 童子六七人、沂(川の名)に浴し舞雩(雨乞いに舞う台)に風じ(涼み)詠じて帰らん】遊戯の妙用を『論語』「先進」第十一の曾子の句を以て詠じた。どんな理でもこの法悦には届かない。

独り許す 苦吟野外の人

<君ならで誰にか見せん梅の花 色をも香をも知る人ぞ知る>という歌があるが、風雪に耐え、辛酸をなめて得られた梅の香りは、苦勞を噛みしめた「君」でないとほんとうに味わうことはできぬ。

下語。【元是れ山中の人、愛して山中の話を説く】どうしても昔の苦勞話になる。

このように大灯国師のこの頌は、一貫して春に花がその顔容を競

いあう風趣としてうたわれていて、そこに放収だの法戦だのというものは気ぶらいもない、逍遙遊戯のすがたである。

そこには悟のかけらもない、ただ真如のはたらきを見るのみである。すり上げた明暗双々底の心珠の絶妙な味である。

著者プロフィール



白田劫石ごつせき（本名／貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和12年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅三世総裁・師家。庵号／磨ま輒せん庵。平成21年帰寂。

『禅』33号正誤表

前号に次のような誤記がありました。ご執筆者をはじめ、読者の皆様に謹んでお詫び申し上げますとともに、次のように訂正させていただきます。

ページ	行	(誤)	(正)
5頁	下から2行目	人間禅師家分上	人間禅主幹布教師
54頁	8行目	人間禅師家分上	人間禅主幹布教師
71頁	下から1行目	人間禅補教師	人間禅輔教師
78頁	3行目	洗涯庵緑水老禅子	三浦緑水禅子
	6行目	洗涯庵老禅子	緑水禅子